

# 自衛隊におけるイベントのあれこれ

柏井 澄夫

自衛隊におけるイベントに関連して、私自身ORを実施した経験を持たないし、また、寡聞にしてイベントに関連したOR事例についても情報をもち合せていない。そこでここでは、イベントの企画に関連して種々の着想を生むうえで、なんらかの役に立てばと考えて、陸上自衛隊におけるいくつかのイベントを対象に、参考になりうると考えられるポイントについて考察を試みることにする。対象としてとりあげるイベントは、それぞれの特性を考慮し、自衛隊創設記念行事の一環として毎年実施されている観閲式、富士総合火力演習および音楽まつりとする。なお、これらのイベントと若干趣を異にするものとして、平常時自衛隊の分担する役割の1つである災害派遣についても触れる。

## 1. 観 閲 式

### 1.1 観閲式の概要

観閲式は、自衛隊創設記念行事の中で、観艦式と並んで主要な儀式の1つである。内閣総理大臣が観閲官であり、陸海空自衛隊員約5,300名、車両約270両からなる観閲部隊を観閲する。

この観閲式は、観閲官に対する観閲部隊の榮譽礼にはじまり、国旗の掲揚につづいて、観閲官が

整列している観閲部隊を逐次まわって巡閲する。これが終ると観閲官の訓示と来賓の祝辞がある。この間約30分。つづいて、観閲式のハイライトともいえる観閲行進が、約1時間にわたって展開される。まず、音楽隊を先頭に約4,100名からなる徒歩部隊の糸乱れない観閲行進である。その終末近くから、各種ヘリコプター、要撃戦闘機、対潜哨戒機および輸送機等最新の航空機約100機からなる観閲飛行が、式場上空を圧して展開される。最後に戦車、装甲車、火砲、ミサイル等近代装備の粹からなる約270両(人員約1,100名)の車両部隊の威風堂々の行進が行なわれて幕となる。

観閲式観客の規模は約3万名であり、そのすべてが自衛隊関係の招待者である。この招待者には、国会議員、都縣市等の地方公共団体の首長や議会議員はもちろんのこと、各国の大公使や武官も含まれる。

このように約3万名の観客を迎えて厳粛裏に整齐と儀式である観閲式を進行させるためには、観閲部隊の配置・行動、式場の準備・維持、観客の受付・誘導・整理態勢とその要領、式場内における移動統制、衛生・救護、厚生等万般にわたって綿密周到な計画を作成し、式の進行を運営管理する必要がある。この仕事は、約4,100名の裏方部隊の担任である。

### 1.2 観閲式で指摘されるポイント

観客はすべて自衛隊関係の招待者であり、招待券を介して受付・誘導等が処理されている。した

かしわい すみお(もと防衛庁陸上自衛隊陸幕OR班長)  
現在 株式会社オペレーションズ 〒102 千代田区九段南4-6-9

がって、**観客の規模**について一般の催し物におけるよう入場者予測は必要ない。しかし、招待者の規模とその細部区分ごとの構成をどうするかといった問題はある。この招待者(=観客)の規模は、各部隊等からの希望招待者数をもとに、式場の物理的収容可能量、当事の広報政策等を考慮して設定されよう。この場合、本番に先立って実施される総合予行の活用も考慮されよう。

次に考えられるポイントは、**混雑防止策**の問題である。観客の受付・誘導・整理をいかに整齊に行なうかといった式典前観客入場時の問題と、式典終了後観客離散時の混雑防止の問題がある。観客入場時の混雑防止は、主として式場へのアクセス経路に応じて複数の受付ゲートを設定することと受付・案内・整理態勢を整えることによっている。ちなみに、観閲式では6個のゲートが設けられ、約490名の人員で観客の受付・案内・整理を行なっているようである。式典終了時の混雑防止策の1つとして、観客が徐々に式場から離散するように仕向ける方法が考えられる。自衛隊の観閲式では、12.00に式は終了するが、12.10以降15.00までのあいだ、式場において音楽の演奏と装備品の展示が催される。売店も設けられ給湯も行なわれる。これは、式終了直後一時に観客が離散するのを防ぎ、式終了時の混雑防止に役立っていると考えられる。

その他のポイントとして、**便所の設置と衛生・救護態勢を整える**問題を指摘しておきたい。これらの問題は、ともすると見落としやすいが、しかし重要な計画要素であると考えからである。観閲式そのものの所要時間は、約2時間であるが、観閲部隊、観客はそれに先立って入場し準備を完了する必要がある、式典終了後の滞留を考えると、生理的要求を満たすための施設を整えることは重要であろう。また観客、観閲部隊、裏方部隊合せて約4万名が、狭い式場で式典に参画するわけであり、不時に発生する患者への対応態勢を整えることは、主催者の責任であろうと考える。

## 2. 富士総合火力演習

### 2.1 富士総合火力演習の概要

そもそも富士総合火力演習は、陸上自衛隊富士学校の学生に対して、実弾射撃により普・特・機火力の効果と火力戦闘の実態を認識させることを目的としたものようである。しかし、せっかくの機会だから、これを一般にも公開して自衛隊に関する認識を深めていただくということのようであり、毎年9月に実施されている。

展示される実弾射撃は、次のように一連の戦闘経過に関するシナリオにもとづき、各種射撃が展示されるように計画されている。敵は我が防御陣地を攻撃すべく逐次近迫してくる。この段階では敵の前進遅滞が関心事であり、その手段としての戦車・装甲部隊による遅滞戦闘、航空機による対地攻撃および空挺・ヘリボン部隊による攻撃が展示される。つづいて防御陣地に対する敵の本格的な攻撃が行なわれるが、この段階における主な戦闘行動である砲迫による火力戦闘、対戦車戦闘および敵の突撃に対する破碎射撃が展示される。最後に、我が陣地に侵入した敵に対し、これを駆逐するための逆襲戦闘の展示で終る。

この実弾射撃の展示は、人員約1,500名、戦車等車両約200両、航空機22機、火砲約40門の部隊により、約2万名の観客の前で約2時間にわたって展開される。射耗される弾量は約30トン(約1億円相当)である。

一般公開時の観客は、すべて自衛隊関係の招待者であり、あらかじめ交付される入場整理券により、観客の受け付け整理が行なわれる。

### 2.2 総合火力演習で指摘されるポイント

イベントの企画という面からすると、**安全管理**および地域における**交通統制**の在り方が大きな関心事となろう。しかし、実弾射撃時の危険区域の設定、射場管理の在り方等については、自衛隊においては十分な安全余裕を見込んで実施されるようルール化されている。

しいて興味ある問題としてとりあげるならば、催し物としてというよりも実際の戦闘行動における火力運用要領や射撃方法の選択の問題が考えられる。

その時の戦況、我にとっての目標の重要度、我の手持ち火器の状況等にもとづいて、有効適切な火力を適時に発揮するための指揮能力の開発は、これら火力部隊における重要な訓練項目の1つである。なお、この分野は、目標の種類・状態に応ずる射撃方法の選択の問題も含めてコンピュータを利用した情報システムの比較的有効な支援が期待される分野であり、各国ともその努力を傾注しているようである。

なお、射撃方法の1つとして、曝露した人員目標に対する射撃に当っては、不意急襲的な射撃効果を取めるため、各種火砲の同時集中射撃が行なわれることもある。この場合、各火砲の射弾が目標地域に同時に弾着するように、各火砲の発射時機が規制される。この射撃は、比較的展示効果の大きいものの1つである。

### 3. 音楽まつり

#### 3.1 音楽まつりの概要

自衛隊音楽まつりは、自衛隊創設記念の広報行事の一環として、音楽演奏を通じて自衛隊の活動を広く国民一般に紹介し、自衛隊に対する理解と認識を深めてもらうという趣旨で実施されている。

各部隊等からの出演部隊の規模は約950名であり、各音楽隊による演奏のほか、ドリル、陣太鼓、鼓笛隊等多彩な出演種目が用意されている。

1回の公演時間は約2時間で、4回公演され、金曜日18.00、土曜日11.30、13.00、18.30の開催である。

観客は、さきに述べた2つのイベントとは異なり、広く一般に公募される。自衛隊音楽まつりの開催およびその応募要領について、開催2カ月前からの所要の新聞・雑誌に掲載される。応募

したい人は往復はがきで申し込み、抽選が行なわれ、当選者には、はがき入場券が送られる。

#### 3.2 音楽まつりで指摘されるポイント

音楽まつりで考えられる1つの問題は、**当選者の規模**をどれくらいに決めておけばよいかという問題である。従来使用されている日本武道館では、1回の収容可能観客規模は8,000名、4回分延32,000名であるが、応募者数は5~6万名のようである。ところが従来の経験からすると、当選しながら公演当日来場しない人たちもかなり見受けられ、その割合は、公演回の早いほど大きいようである。一方、主催者側の立場では、催しの趣旨から不参加者による空席はなるべく避けることが望ましい。そこで、この不参加者数を見越してどれだけ余分に多くの当選者を決めておくかという問題が生じる。

この問題への現実の対応は、過去の経験から得られる不参加率に相当する数だけ余分に当選者を決める方法によっているようである。もし、実際の参加者が用意されている観覧席8,000を越す場合は、その超過分に対しては、観覧という面からは若干質の落ちるステージ横の予備席を充当することで対応しているようである。この例のように、ちょっと視点のおきどころを変えてみることでより解決策が見いだされることもあながい多いのではなかろうか。

### 4. 災害派遣時の撤収時機選定の問題

さきに述べた3件は、いずれもいわゆる催し物に関するものであるが、ここでは若干趣を異にし、災害派遣というできごとに関連した問題についてふれることとする。

天災地変その他の災害にさいして、人命または財産の保護のため必要があると認められる場合、法の定めるところにより自衛隊の災害派遣が実施される。聞きおよぶところによると、災害派遣された時の撤収時機の選定は、種々の要素が交錯するむずかしい決定問題のようである。以下、私な

りに理解しているその特徴を、勝手な推測と創作をまじえて浮き彫りにしてみよう。

規則的には、災害派遣は、人命または財産の保護のために行なう応急救援および応急復旧が終るまでを限度とすることになっている。しかし、現実の場で災害派遣打ち切り、つまり撤収の時機を決めることは、なかなかむずかしいことのようにある。

災害派遣された自衛隊側では、人命または財産保護に関連した主要な救援活動が一段落し、後は地域の人々や関連機関等により対応可能であろうと判断される段階に立ち至れば、なるべく早く撤収して平常の隊務遂行状態に復帰したいと考えよう。しかし、常日頃募集や援護等に関連して、地域の各機関等に種々お世話になっており、培われた自衛隊と地域との紐帯をますます維持発展させなければならないことから、簡単に「ハイ終了。引き揚げます」というわけにはいかないようである。種々依頼されれば無下に断ることもできず、ずるずると派遣期間が長引くことになる。

一方、災害派遣を受けた側では、自衛隊にいてもらうほうが何かと便利であり、しかも経費面の心配をしなくて良いことから、なるべく長く派遣されていることを希望しよう。地元出身議員さんの中には、これはおれがやったんだという何ものかを残すために、派遣されている自衛隊にある特定の仕事をやらせるように仕向ける人もいるかもしれない。

また、地元業者の立場からすると、被災当初は別として若干時間を経てくると、採算性のある仕事は自衛隊にやってもらうのではなくて、自分たちが請負ってやりたいと考えよう。

このように各立場からの思惑が錯ち合う中で、下手に早く撤収しすぎて自衛隊はわれわれを見捨てたと現地の人々に思われることは良くない

し、かといって、あまり長く撤収を引き延して、かえってお互いに悪い感情を生ずるようなことがあっても良くない。やはり物ごとには潮時があるように、災害派遣の撤収時機にも1つの潮時があるようである。

その潮時は、概念的にはさきにも述べたように、災害派遣の目的、救援活動の現況等に即して、自衛隊が担任することが望ましい救援活動が一段落した時機といえよう。しかし、その具体的な選定に当たっては、地域住民を含む関連機関等の人々の説得のしやすさを最大の関心事として検討することが望まれよう。大義名分が立ち、関係あるより多くの人々の納得が得られる時機であることが重要であるからである。

ところで、より多くの人々の理解と納得が得られる適切な撤収時機を設定し得たとしても、それを関連ある人々に周知させる措置をとらなれない時は、後々に種々の禍根を残すおそれが大きいと考えられる。

つまり、撤収時機選定の問題は、撤収時機とそれを周知させる方法の選定の問題である。考えられる具体的な方法の1つとして、次の方法が考えられる。

「災害派遣要請者が自衛隊に期待した救援活動は、かくかくしかじかである。それは、これから実施しようとするこれこれの最後の努力をもって終了する」

ということ、要請側が確認し一般に周知させる。それを受けて、自衛隊側は、指定された最後の努力終了後撤収するという方法である。

これは、乗り遅れまいと満員バスに必死に乗ろうとする乗客のためなかなかバスが発車できない状況下で、「このバスの定員は87名です。あと2名乗れます。皆さんご協力ください。」と発言する運転手の気転に似た要素を含んでいる。